



第106号

令和7年6月10日発行

石坂洋次郎文学記念館

〒013-0005

秋田県横手市幸町
2-10

TEL&FAX

0182(33)5052

令和7年度石坂洋次郎文学記念館

ミニ企画展

「石坂洋次郎と葛西善蔵」

◆会期

令和7年7月4日(金)

～9月15日(月・祝)

◆場所

石坂洋次郎文学記念館

◆休館日

会期中なし

◆主催

横手市教育委員会

石坂洋次郎文学記念館施設運営協議会

石坂洋次郎文学記念館友の会

◆協力

青森県近代文学館

弘前市立郷土文学館



石坂洋次郎(1900～1986)と同郷弘前の先輩作家・葛西善蔵(1887～1928)との交流を紹介するミニ企画展を開催します。

葛西善蔵は貧困や病気に苦しみながら、主に自身や周辺を題材とした私小説を書きました。作品は芥川龍之介や佐藤春夫など同時代を生きた大正文壇の作家たちに評価され、没後には「私小説の神様」と呼ばれるようになります。

洋次郎と善蔵の交流は1923(大正12)年7月8日、大学生の洋次郎が鎌倉・建長寺内の宝珠院に間借りする善蔵を訪ねたことから始まりました。大学卒業後、青森県立弘前高等女学校(現・弘前中央高校)の教師となった洋次郎を頼って、善蔵が突然訪ねてきた時は友人と二人で世話をしています。

この時の善蔵との「交渉」を洋次郎は短編小説『金魚』に詳しく記しました。

今回はこの『金魚』を中心に、葛西文学の影響が感じられる初期作品や善蔵について書かれた随筆収録の図書、随筆の抜粋文などを展示します。

皆様のご来館をお待ちしています。

ミニ企画展準備のため、次の2日間は臨時休館します。

7月2日(水)、3日(木)

◆お知らせ

●休館日

今年度の休館日は、次の通りです。

○～11月30日

休館日なし

※臨時休館日を除く

○12月1日～令和8年3月31日

●毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)

●祝日の翌日

●年末年始(12月29日～1月3日)

◆開催報告（令和6年度）

●企画展

「みる！石坂文学——石坂洋次郎原作
映画ポスター展——」

令和6年9月7日（土）～12月28日（土）

※会期を前期、後期に分け一部展示替え

石坂洋次郎原作映画のポスターと原作の図書資料を中心に展示、紹介する企画展を開催しました。本展で展示したポスターやパンフレット、台本など映画資料のほとんどは横手市にお住いの個人からお借りしたものです。展示した資料は前期展が82点、後期展が81点です。ポスターと併せて、洋次郎による自作説明や映画化作品をどのように見ているのかを書いた随筆の抜粋文章をじっくりご覧になる方が多かったです。

来館者からは、「懐かしい。また映画を観たくなった」、「好きな俳優を見られて嬉しい」、「全く知らない作家だと思っていたら、知っている映画の原作者だった」などの声が聞かれました。



展示風景

●ミニ企画展

「保養地の洋次郎 伊豆編」

令和7年1月16日（木）～3月30日（日）

石坂洋次郎ゆかりの地の一つ伊豆に特化したミニ企画展を開催しました。本展では、伊豆で撮られた写真と伊豆が舞台の小説、洋次郎が当地について書いた随筆収録の図書を中心に紹介しました。展示した資料は53点です。

資料の中でも、静岡県賀茂郡の谷津温泉と伊豆今井浜温泉で撮られた写真をじっくりご覧になる方が多かったです。伊豆今井浜温泉のコーナーには、洋次郎が旅館・今井荘でどのように一日を過ごしていたのかを紹介する表も展示しました。

来館者からは、「静岡に住んでいるが、洋次郎が伊豆を訪れていたとは知らなかった」、「伊豆が舞台の作品が多くて驚いた」、「前に旅行で訪れた場所が舞台になっていて面白かった。また行ってみたいと思う」などの声が聞かれました。



展示風景

◆ミニ企画展 展示資料紹介

短冊「碧落碑無贋本 洋次郎」



こちらの短冊は、洋次郎が葛西善蔵に書いてもらった禅の言葉を真似て知人に書き送ったものです。

「碧落碑無二贋本」（へきらくのひにがんばんなし）、これは天に書かれた文字には嘘が一つもないという意味の言葉で、文学者の最上の心得に触れたものだといえます。

洋次郎は善蔵からもらった書を軸にして座敷にかけ、その部屋で執筆をしていました。「白根山雲の波立ち夕ばえて妻し思えば、胸痛むなり」という善蔵が作った和歌も書いてもらっており、この二枚を時々床の間に掛けて眺めていたといえます。

参照・引用

「葛西善蔵の軸」1955年6月執筆。
東方新書『人物のいる風景』（1957年・東方社）収録。